HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	はじめに
Author(s)	宇山, 智彦
Description	ISBN: 9784938637736
Relation	中央ユーラシア研究を拓く：北海道中央ユーラシア研究会第100回記念．北海道中央ユーラシア研究会編
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 5, 2-2
Issue Date	2012-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51950
Type	other
File Information	SEP5_001.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

はじめに

この報告集は、2000 年 4 月に設立された北海道中央ユーラシア研究会（2003 年 12 月までは北海道中央アジア研究会）が 2012 年 7 月に第 100 回を迎えたことを記念して、刊行されるものである。この研究会が活動場所とするスラブ研究センターは、1990 年代中頃から中央ユーラシア研究に本格的に着手し、現在では、伝統あるロシア・東欧研究に加えて中央ユーラシア研究でも全国的・国際的な拠点となるに至っているが、その過程において北海道中央ユーラシア研究会は、センター内外の研究者が集まってじっくり議論する場、特に若手が報告・討論を通して成長していく場として、重要な役割を果たしてきた。

本書は、第 1 回から第 100 回までの例会等の一覧、第 68 回以降の例会の報告要旨・参加記、そして第 100 回記念大会のペーパー・参加記という 3 部から成る。ほとんどは当研究会のウェブサイト<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/casia/>に掲載されている諸資料をまとめ直したものだが、初期の例会のレジュメは極めて不規則にしか保存されていないため、本書には収録しなかった。言うまでもなく、報告者・討論者等の所属・肩書、および参加記で触れられている博士論文・修士論文の執筆状況などはすべて当時のものである。

このように研究会の活動内容を一望できる形にすると、まさに「継続は力なり」で、この会が中央ユーラシアの歴史、政治、人類学、経済、文化などの分野にわたって多くの実績を積み重ねてきたことが分かる。参加記では時に、報告に対して厳しい批判があったことが触れられているが、率直な意見交換によって、その後さらなる発展を見た研究も多い。近年は安直な業績主義で、査読誌での論文発表や大きな学会での報告ばかりが重視される傾向があるが、当研究会のような場で濃密な議論を繰り返し、異なる分野の報告についても意見が言える力を養うことは、研究者の成長にとって重要な意味を持つはずである。

本書の大半を占める例会報告は、研究会の事務局を構成する、北海道大学大学院文学研究科スラブ社会文化論専修（スラブ研究センターが協力講座として担当するコース）の中央ユーラシア関係の大学院生たちの尽力により、各例会後に速やかにまとめられてきたものである。彼ら・彼女らに心からの拍手を送りたい。また報告集の編集作業は、同専修の竹村寧乃さんが中心になって行った。彼女の迅速で丁寧な仕事ぶりに深く感謝したい。

2012 年 10 月

北海道中央ユーラシア研究会を代表して

宇山　智彦